

山と博物館

第57巻 第6号 2012年6月25日

市立大町山岳博物館



(写真提供：スイス政府観光局)

スイス政府観光局・市立大町山岳博物館 共同企画展 / ユングフラウ鉄道全線開通100周年記念

「スイス山岳観光の黄金期と日本人 ―その魅力と文化を伝えた人々―」

会期：平成24年7月14日(土)～10月21日(日)

共同企画展の開催にあたって

牛越 徹

市立大町山岳博物館は昨年、創立六十周年を迎えました。これまで、ご支援をいただきました市民の皆様と関係者の皆様に、あらためて感謝申し上げます。さて、このたび山岳博物館では、スイス政府観光局との共同企画展として「スイス山岳観光の黄金期と日本人 ―その魅力と文化を伝えた人々―」を開催する運びとなりました。

この展覧会は、ヨーロッパアルプスを代表するスイスで最も有名な登山鉄道「ユングフラウ鉄道」が、今年八月に全線開通百周年という大きな節目を迎えますことから、一昨年、スイス政府観光局から共同企画のご提案をいただき、ともに企画・準備を進めてまいりました。今回は併せて、平成十二年の「スイスアルプス博物館」閉館に伴い当館にご寄贈いただいた貴重な収蔵資料もご覧いただきたいと存じます。

山と水の美しい国「というイメージが国際的に定着しているスイス。こうした魅力的な印象を日本へ持ち帰って広めたのが、ヨーロッパアルプスにあって、戦前から盛んにスイスを訪れた日本人登山者たちでした。なかでも、今回の展示で紹介する日本人登山家のひとり、スイスでも著名な登山家であった横恒氏氏は、戦後一時期、自宅があった横浜から大町市内に再疎開していたことがあり、大町にも大変ゆかりの深い人物です。

会期中には、ゲスト講師をお招きしてのトークショーのほか、展示解説を行うミュージアムトークなどの関連イベントを開催します。展覧会を通して、登山鉄道を中心とした山岳観光の国スイスの魅力を存分に体感していただきますとともに、両国の文化交流の架け橋になった日本人登山家たちの深い想いを多くの皆さんに知っていただければ幸いです。

(大町市長)

共同企画展

「スイス山岳観光の黄金期と日本人」

―その魅力と文化を伝えた人々―

展示資料解説

市立大町山岳博物館

平成二十四年(二〇一二年)八月に全線開通から百年を迎えるスイスのユングフラウ鉄道。世界中から毎年約七十万人が利用し、これまでに約二千三百万人を超える観光客を乗せて走り続けてきたアルプスを代表するスイスで最も有名な登山鉄道です。

このユングフラウ鉄道全線開通百周年を記念し、スイス政府観光局と市立大町山岳博物館の共同企画による展覧会を開催します。

スイス政府観光局とは以前から縁があり、平成十二年に当時、スイス政府観光局の事務所に設置されていた「スイスアルプス博物館」閉館にともない、収蔵する全資料約二三〇点を市立大町山岳博物館にご寄贈いただきました。こうした関係もあり、このたびの企画展開催へと結びついてまいりました。なお、スイスアルプス博物館から寄せられた資料につきましては、経緯などを含め、本誌第四六巻第八号(二〇一一年八月)、第四六巻第一一号(二〇一一年十一月)に詳しく記されておりますので、参照ください。

本展では、スイス山岳観光の礎を築いたユングフラウ地方と、その地域での山岳観光の発展とともに敷設されていった登山鉄道の誕生に焦点をあて、スイス山岳観光の黄金期ともいえる当時から現在にいたるまでのスイス山岳観光のさまざまな魅力をお伝えします。

また、アルプスの山岳地域へ登山鉄道が伸びたことで、世界各国の登山家がスイスに集い、数々の日本人登山家もアルプスの峰々に登っています。明治四十三年(一九一〇)にユングフラ

ウ(標高四一五八m)に登山して日本人初のアルプス四千m峰登頂を果たした加賀正太郎や、大正十年(一九二一)に当時未登攀だったアイガー(標高三九七〇m)東山稜を世界で初めて登攀した横有恒など、登山を通じてスイスの魅力と文化を日本に伝え、両国の文化交流の架け橋になった人々をあわせてご紹介いたします。

本展の開催にあわせて展示内容を詳しくまとめた展示解説書を別途、編集・印刷する予定です。展示内容に関する各事柄の詳細な解説は展示解説書にゆずることとし、本誌上では展示資料のうち展示解説書で紹介しきれない実物資料(モノ)の概要について解説します。

1 第一部 山岳観光の国スイス

(1) スイスの山岳ガイド

① (写真) 二八〇年当時のグリンデルワルトの山岳ガイドたち 当館蔵(SAM旧蔵) L 227

× W 24 cm

② (写真) 二八七七年当時のグリンデルワルトの山岳ガイドたち 当館蔵(SAM旧蔵) L 272

× W 34 cm

③ スイス山案内人の手帳 当館蔵(SAM旧蔵) L 157 × W 117 cm

未使用の手帳で、ドイツ語版とフランス語版の二冊。これらはスイスの山岳ガイドが携帯する公式の手帳です。

④ スイス山案内人が持つ名刺の例 当館蔵(SAM旧蔵) L 5.5 × W 9.1 L 49 × W 9 cm

⑤ アイガー・ミッテルレギ稜(東山稜)の固定ザイルとアイガーの石 当館蔵(SAM旧蔵)

ザイルとアイガーの石 当館蔵(SAM旧蔵)

L 60 × W 41.5 cm 写真1

現地の岩場から固定ザイル(石を欠いてきたものです。まるで運動会の綱引き用の太い綱のようなザイルは、石に打ちこまれた固定用の金具に通され、しっかりとすえ付けられています。この固定ザイルは昭和三十六年(一九六二)から同六十一年まで実際に現地で使用されたものです。



写真1 アイガー・ミッテルレギ稜(東山稜)の固定ザイルとアイガーの石

(2) スイスの山小屋

① スイス山小屋の料金袋 当館蔵(SAM旧蔵) L 162 × W 114 cm

② スイス山小屋の設計図 当館蔵(SAM旧蔵) L 30.4 × W 40.4 cm

③ スイス山小屋の増築に関する計画書 当館蔵(SAM旧蔵) L 30 × W 21.2 cm

フリーウンデン・ヒュッテのものです(複写)。

(3) スイス山岳会

① スイス山岳会の旗 当館蔵(SAM旧蔵) L 27 × W 16.5 cm

スイス山岳会(SAC) SCHWEIZER ALPEN-CLUBのエンブレムが描かれた細長い三角形の小旗(ペナント)です。

② スイス山岳会会報『Die Alpen』 当館蔵(SAM旧蔵) L 23.5 × W 21 cm

③ スイス山岳会会報『Die Alpen Monatsbulletin Des SAC-LIII 77』 当館蔵(SAM旧蔵) L 24.8 × W 17.8 cm

昭和十年頃、アルフレッド・エルク(二代目)作。旧蔵者が昭和十年頃に購入したものです。

④ スイス製の登山用具

① スイス製ヒッケル(エルク) 当館蔵 L 88.4 × W 29 cm

昭和十年頃、アルフレッド・エルク(二代目)作。旧蔵者が昭和十年頃に購入したものです。

エルクはスイスのベルナーオーバーラント地方のツヴァイリヒエネンの鍛冶職人でした。初代はフリッツ・エルクといい、ヒッケル作りの歴史は古く、刻銘のあるヒッケル鍛冶職人としては初期の人物です。

② スイス製ヒッケル(ヘスラー) 日本山岳会蔵、寄託 L 80.9 × W 30.3 cm

大正末から昭和初期頃(一九二〇～三〇年代頃)、ゴットリアベ・ヘスラー作。登山家・洋画家の上田哲農(本名・徹雄)が使用したもの。ヘスラーはヴァレー地方のレッツェンタール(レッツェン谷)周辺の村の鍛冶職人でした。一代限りのヒッケル鍛冶職人だったと思われます。

③ スイス製ヒッケル(シエンク) 日本山岳会蔵、寄託 L 80 × W 29.5 cm

明治末・大正初期から昭和初期頃(一九一〇～二〇年代頃)、クリスチャン・シエンク(初代)作。登山家・板倉勝宣が使用したもの。シエンクはベルナーオーバーラント地方のグリンデルワルトの鍛冶職人でした。機能美を追求した形は美しく切れ味に優れ、道具の域を越えたひとつの芸術品としても完成されています。その作風は日本のヒッケル鍛冶職人の山内や門田がペントのヒッケルとともにモデルとしました。二代目はフリッツ・シエンク。

④ スイス製ヒッケル(ペント) 当館蔵(SAM旧蔵) L 92 × W 31 cm

大正末・昭和初期頃(一九二〇年代頃)、アルフレッド・ペント(二代目)作。アイガーのミッテルレギ・ヒュッテ(ミッテルレギ小屋)に常設され、大正十三年から昭和六十年まで使用さ

れたもの。ペントはベルナーオーバーラント地方のグリンデルワルトの鍛冶職人です。初代はカール・ペント、三代目はアルフレット・ペント(ジュニア)。現在、四代目のルウディ・ペントが工場を継いでいます。

⑤ スイス製ビッケル(ウイリッシュ)

(SAM旧蔵) L 95 × W 32 × 2 cm

当館蔵

昭和初期頃(一九三〇年代頃)、ヨーゼフ・ウイリッシュ作。和田野基が昭和九年頃にマッターホルン、モンテローザなどで使用したもののウイリッシュはヴァレー地方のツェルマットの隣村テッシュの鍛冶職人です。初代の作風は直線美が特徴。二代目はヨーゼフの甥にあたるマックス・ウイリッシュとローマン・ウイリッシュ兄弟。現在、三代目となるコンスタンツ・ウイリッシュとゴットフリート・ウイリッシュ兄弟が跡を継いでいます。

⑥ スイス製アイゼン

当館蔵(SAM旧蔵) L 29 × W 12 × 3 L 32 × W 12 × 8 cm

当館蔵

ペント作。昭和十年以降に作られたもの(一九五五年頃、三代目アルフレット・ペント作)。鍛造式の八本爪です。

⑦ カラビナ

当館蔵(SAM旧蔵) (二点) L 9.8 × 10 × W 5 × 5.3 cm

当館蔵

⑧ スイス製ハーケン

当館蔵(SAM旧蔵) (四点) L 19 × 11 × 2 cm

当館蔵

ペント作の二本二代目アルフレット・ペント作か。昭和初期頃(一九三〇〜四〇年頃)まで使われたものです。

⑨ スイス製リュックサック(キスリング)

当館蔵 L 55 × W 45 cm II 写真2

当館蔵

大正十三年、ヨハネス・ヒューフ・キスリング作。キスリングはグリンデルワルトの牛馬具・袋物職人でした。地元山岳ガイドから依頼され、使い易いように従来の背負袋に改良を加えて作られたのがこうした形のリュックサックでした。その特徴は蓋がなく巾着のように口を縛ることで、荷物を上に積みあげてたくさん背負えたことにあり、同形のリュックサックが普及しました。展示資料

は登山用品専門店・片桐が旧蔵していたものです。一説には昭和四年、二代目・片桐盛之助が横有恒と松方三郎の依頼を受け、横が持ち帰ったキスリング作のリュックサックをモデルに日本で初めて同形のものを作ったといわれています。その後、「キスリング」という呼び名は日本国内で同形リュックサックの代名詞となりました。



写真2 スイス製リュックサック(キスリング)

⑩ スイス製リュックサック(ルビ)

当館蔵(SAM旧蔵) L 58 × W 37 × 5 cm

当館蔵

ハンス・ルビ作。昭和三十五年頃に使用されたもの。ルビはグリンデルワルトの袋物職人でした。ルビはこうしたリュックサックを昭和十五年頃から多数作りました。

⑪ 麻ザイル

当館蔵(SAM旧蔵) L 約30 m

当館蔵

昭和二十五年頃まで使われていたものです。近代登山黎明期以降、ザイルはこうした麻製が主でしたが、昭和中期頃(一九六〇年代頃)からナイロン製が使われはじめます。

⑫ クレタリーシューズ

当館蔵(SAM旧蔵) L 28 × W 10 × 5 cm

当館蔵

初期の岩登り用の靴です。キャンパス生地フェルト底でできた軽量の靴で、乾いた岩専用として昭和初期頃(一九三〇〜四〇年頃)まで盛んに使われました。

⑬ ナイロンザイル

当館蔵(SAM旧蔵) L 約20 m

当館蔵

このザイルはアイガー登攀などにしばしば用いられたものです。

2 第二部 登山鉄道の誕生

— ユングフラウ鉄道の歴史 —

このコーナーは、パネル展示のみで構成されています(実物資料の展示はありません)。

3 第三部 アルプスと日本人

— 日本人のアルプス登山 —

(1) 加賀正太郎のユングフラウ登頂

① 加賀正太郎使用の装備(全身人形・外套、上着、ズボン、紙底登山靴、ストック、リング付ステッキ、腰掛) 当館蔵 H 127 × W 68 cm II 写真3



写真3 加賀正太郎の装備(全身人形)

明治四十三年にユングフラウに登山して日本人初のアルプス四千m峰登頂を果たした加賀正太郎が、その登山で使用したものです(帽子とソックスは参考展示で加賀正太郎使用のものではありません)。外套は、ローデックロスというオーストリア・チロル地方の伝統的な紡毛織物の生地です。この生地は油脂分の残ったウールから糸を紡いでいて撥水性があり、毛足が長く目が詰まっているのが特徴です。柔らかで軽く、防水・防風性に優れた生地が古くからハンテイングの防寒コートなどに仕立てられています。ズボンは、長さが膝下までで裾を絞めることができないニッカポッカーです。こうした短ズボンは裾が

邪魔にならないことから乗馬やゴルフ、登山などのスポーツウェアとして使われていました。ストック、リング付ステッキは、先端部分に尖った金具(石突)がついていて氷河の上などを歩くときに役立ちました。持ち手側には折りたたみ式の腰掛がついていて、広げると小休止の際などに腰を下ろせる仕組みになっています。

ユングフラウ登山に必要な装備は渡欧後、現地で全て買いそろえました。外套・上着・ズボン・帽子・紙底登山靴はドイツのミュンヘンで、麻ザイル・ランタン・ビッケルはスイスのインターラーケンで整えています。ユングフラウ登山後、日本に持ち帰られたこれら西洋の登山装備一式は、近代登山黎明期にあつた国内の登山界に影響を与えました。

② 加賀正太郎使用の麻ザイルとランタン 当館蔵 ザイル径1.2cm、ランタンW 9 × H 18 cm

明治四十三年のユングフラウ登山で使用されたものです。これは麻製の編みザイルで、一説には日本に持ち帰られた最初のザイル(登山用)ともいわれています。ランタンは折りたたみ式で、内部背面には反射板が付き、底面中央部分にロウソク入れ用の穴が開いています。

③ 加賀正太郎使用のビッケル

当館蔵 L 110 × W 23 cm II 写真4

初代フリッツ・エルク作。明治四十三年のユングフラウ登山で使用されたものです。ビッケルの原型である手杵を付けたアルペンストックの水杵から、登山専用の道具であるビッケルへと移り変わる過渡期にあつたビッケルで、ヘッド部分が小ぶりなのが特徴です。日本に持ち帰られた最初のビッケルといわれています。



写真4 (左上から)加賀正太郎使用の麻ザイル、ランタン、ビッケル、ホイッスル、ゲートル、色紙

④ 加賀正太郎使用のホイッスル 当館蔵 L 5.7 × W 2.4 cm 写真4

⑤ 加賀正太郎使用のゲートル 当館蔵 L 260 × W 11 cm 写真4

英国を代表するファッションブランドのひとつであるバーバリー製です。渡欧後、ロンドンの本店で購入したものでしょうか。

⑥ 加賀正太郎旧蔵の柳行李 当館蔵 L 60 × W 40 × H 25 cm

明治四十三年のユングフラウ登山で使用した服装を帰国後、収納したものと思われます。上蓋と下蓋の外面にはそれぞれ「加賀正太郎」の墨書があり、上蓋の側面には「正太郎主人一九一〇年 洋行中アルプス行 記念着(類)」の貼紙があります。

⑦ 加賀正太郎旧蔵のリュックサック 当館蔵 L 50 × W 45 cm

ミズノ製。このキャンバス地のリュックサックは比較的新しい時代のものでしょうか、縫い付けられた「R.MIZUNO & Co., LTD (カッブマーク) TRADE MARK MADE IN JAPAN」というタグのデザインから昭和初期頃のものかと思われます。

⑧ 色紙 当館蔵 L 27 × W 24 cm 写真4

昭和二十五年十一月十日、加賀正太郎の日本山岳会名誉会員を祝す「輝く山友の集ひ」における寄書きが記されています。

(2) 横有恒のアイガー東山稜初登攀

① 横有恒使用の革ベスト 日本山岳会蔵・寄託 L 53 × W 40 cm 写真5

大正十年に当時未登攀だったアイガー東山稜を世界で初めて登攀した横有恒がその登山で使用したものです。内側に「Y. MAKI Eiger 3975 O-G SEPT. 10th 1921」のサインあり。

② 横有恒使用のパイプ 日本山岳会蔵・寄託 L 11 × W 3 cm 写真5

大正十年のアイガー東山稜初登攀で使用したものの収納袋付。大正十四年のカナディアン・ロッキーのアルバータ初登頂時と昭和二十二年のヒマラヤの

マナスル初登頂時でも使用した愛用の品です。

③ 横有恒使用のソックス 日本山岳会蔵・寄託 L 53 × W 22 cm 写真5

大正十年のアイガー東山稜初登攀で使用したものの。毛糸製、半足。グリーンデルワルトの娘たちが心を込めて編んでくれたものです。後年、このソックスのほか、革ベストとパイプといったアイガー初登攀時の記念の品々を横から授かった佐藤久一郎(慶應義塾山岳部OBで横の後輩にあたる)は初登攀から半世紀ぶりに、ソックスを編んだ当時の娘さんたち(お婆さんたち)になつていたをスイスに訪ねています。「ヘル横を知っています※」といって欲待されたり、横から託された品を届けると包みを解きながら涙ぐんだりしたといえます。グリーンデルワルトの人々に横がいかに愛されていたかを伝えるエピソードのひとつです。

※「ヘル・ヘル」はドイツ語で「氏」など男性に対する敬称。



写真5 (上)横有恒使用のビッケル、ソックス、パイプ、革ベスト
(下)秩父宮使用の鉄底登山靴、サングラス、毛手袋

④ 横有恒使用のビッケル 日本山岳会蔵・寄託 L 22.8 × W 32.3 cm 写真5

シャフト部分ではなく、ヘッド部分のみ。初代クリスチャン・シェンク作で、「MAN」の金象嵌が施されています。

⑤ 横有恒の著書『山行』 当館蔵(SAM旧蔵) L 21.5 × W 15.7 cm

岡書院、昭和二十七年発行。初版。自筆礼文入り。

⑥ 横有恒の著書『わたしの山旅』 当館蔵 L 17.3 × W 10.5 cm

岩波書店、昭和四十三年発行。初版。

⑦ 横有恒の書簡 当館蔵(便箋) L 25 × W 17.5 cm

昭和二十九年、縣信宛。知人の登山案内の依頼の手紙です。

⑧ 横有恒筆の色紙 当館蔵(額寸) L 47.5 × W 35.5 cm

額入。昭和五十一年、清水悟郎宛。「山を尊び山を愛し 山と共に生く」と記されています。

横有恒は太平洋戦争後、昭和二十年十月から同二十二年十一月まで長野県大町市常盤泉仏崎に、地元大町の百瀬慎太郎の手引きによって、奥さんと息子さんの一家三人で再疎開していました。戦時中の空襲で横浜の自宅と家財の一切を失い、国策の拓殖事業に携わっていたことで侵略に協力したとして戦後、GHQ(連合国軍総司令部)から公職追放の処置を受け、住居も仕事もなくなったことによる再疎開でした。再疎開先となつた個人宅では、横一家に離れを提供しました。

(3) 秩父宮雅仁親王のアルプス登山

① 秩父宮使用の鉄底登山靴 日本山岳会蔵・寄託 L 31 × W 11 × H 29 cm 写真5

秩父宮雅仁親王は大正天皇の第二皇子で、昭和天皇の弟宮にあたります。「山の宮様」「スポーツの宮様」と呼ばれ、スキーや登山、ラグビーなどのスポーツを愛好し、スポーツの振興にご尽力されました。英国留学中の昭和元年夏、横有恒と松方三郎(登山家、ジャーナリスト)らが同行してマッターホルンなどスイスアルプスの峰々へ登山しました。この鉄底登山靴をはじめ、毛手袋とサングラスはそのときに使用されたものと思われます。

② 秩父宮使用の毛手袋 日本山岳会蔵・寄託 L 24 × W 10 cm

③ 秩父宮使用のサングラス(ケース付) 日本山岳会蔵・寄託 L 12.7 × W 6 cm 写真5

④ 松方三郎の著書『アルプス記』 当館蔵 L 19.7 × W 13.6 cm

龍星閣、昭和十二年発行。初版。

秩父宮が山に対して造詣が深かったことや日本学術振興会の総裁を歴任されたことから、昭和三十八年度から平成七年度まで、秩父宮記念学術賞が制定されました。同賞はフィールドワークにもつた山に関する研究成果に対して贈られてきました。昭和四十年には市立大町山岳博物館の「山に関する科学の進歩についての著しい貢献」に対して第二回秩父宮記念学術賞が授与されています。平成十年からは、秩父宮と同妃を記念した「秩父宮記念山岳賞」が新たに創設され、山岳に対する研究や活動で顕著な業績を挙げた団体や個人に対して同賞が授与されています。【文中、敬称略】(市立大町山岳博物館学芸員 関 悟志)

主要参考文献

加賀正太郎「欧州アルプス越へ」『山岳』第六年第一号

布川欣一「登山史を語る山道具②」『山と溪谷』九八四

大塚隆「近代洋風数寄寄・加賀正太郎」『山と博物館』第三九巻第二号

保阪正康著「秩父宮昭和天皇弟宮の生涯」(中央公論新社、二〇〇〇)

横有恒著「わたしの山旅」(岩波書店、二〇〇二)

「特集 横有恒とマナスル」『山と溪谷』九八五

諏訪部豊「世界のビッケル鍛冶概説」『日本山岳文化学会論集』第二号(日本山岳文化学会、二〇〇五)

【註】SAM旧蔵と表記した資料は、スイスアルプス博物館旧蔵資料です。資料名称は原則として所蔵先の名称によりますが、「一部統一」を図るために変更しました。

山と博物館 第57巻 第6号

発行 二〇一二年六月二十五日発行
〒長野県大町市大町八〇五六一
市立大町山岳博物館

TEL 〇二六・二二二・〇一一一
FAX 〇二六・二二二・二二二二
E-mail: sanpak@city.omachi.nagano.jp
URL: http://www.city.omachi.nagano.jp/sanpak/

印刷 株 奥村印刷
定価 年額 一、五〇〇円(送料別) (切手不可)
郵便振替口座番号 〇五〇四・〇七一・三三三三